日本庭園の見方・楽しみ方

1. 日本庭園の歴史

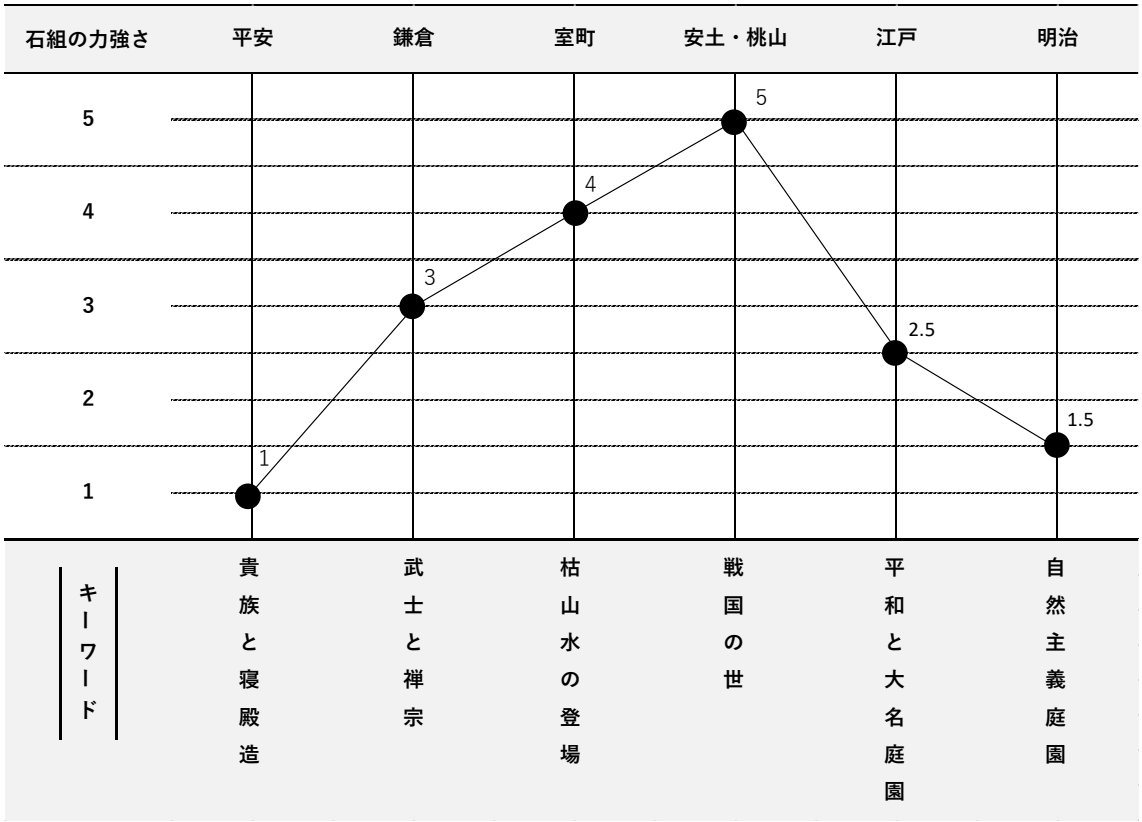
○ ほとんどの庭園の作庭年代は推定（…と考えられる／…と想定される）。

○ 庭園の作庭年代は記録に残りづらい ≠ 建築（棟札）

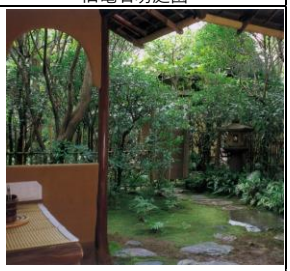
○ 庭園の作庭年代を想定する方法 → 様式（デザイン）

○ 庭園のデザインを見るときのポイント → 石組（いしぐみ）

○ 石組の時代的変化



時代による石組の変化

時代	特徴	代表的な庭園
平　安	寝殿造りの館と 浄土庭園の流行	 平等院  毛越寺
鎌　倉	禅宗の境致と 石立僧による作庭	 瑞泉寺  天龍寺
室　町	枯山水庭園の誕生と 庭園の多様化	 大仙院書院庭園  旧亀石坊庭園
安土・桃山	華麗な書院造庭園と 露地の発展	 二条城二の丸庭園  燕庵露地
江　戸	大規模な大名庭園と 離宮の造営	 水前寺成趣園  桂離宮
明治・大正	自然主義庭園と 洋風庭園の誕生	 無鄰庵庭園  旧古河庭園

2. 日本庭園の言葉（用語）

○ **観賞法**

・池泉回遊式

大規模な池のまわりに築山や御殿、茶室などがつくられ、それをめぐるように楽しむ庭園。明暗、広狭、高低など連続する景観（シークエンス）がカギ。

・座視観賞式（座観式）

建物の中に座って観賞するための庭園。身分の高い人物が座るポイント（上座）から最も美しく見えるようにつくられている。

○ **テクニック**

・借景

庭園外部の風景を庭の景観として取り込む手法。単なる背景となる風景については、借景と呼ばない。

・縮景

自然風景をミニチュアにして庭園に再現する手法。

○ **要素**

・築山（つきやま）

庭園に人工的につくられた山のこと。池を掘った残土で築山がつくられることも多い。

・護岸（ごがん）

池や流れの岸に組まれる護岸。石積、石組、木杭などがある。池の水辺にゆるい勾配をつけて小石を敷き詰めた護岸を州浜（すはま）と呼ぶ。

・石組（いしぐみ／いわぐみ）

複数の自然石を組み合わせて配置したもの。庭園の景観要素となる庭石のことを「景石」と呼び１石だけで置く（据える）こともあり「捨石（すていし）」と呼ぶこともある。立てて据えた石は「立石（りっせき）」、伏せて据えた石は「横石」と呼ぶ。

・飛石（とびいし）

歩行用の石。茶庭（露地）の成立とともに登場。飛石が分かれるところの石を「踏分石（ふみわけいし）」と呼ぶ。

・**延べ段（のべだん）**

大小の自然石を細長く敷き詰めた園路のこと。

・**蹲踞（つくばい）**

茶事の際に心身を清めるための手水鉢（ちょうずばち）を中心とした施設。手水を使うために乗る前石、手燭を置くための手燭石（てしょくいし）、湯の入った桶を置くための湯桶石（ゆとうせき）などで構成される。池や流れの中に手水鉢を置いた流れ蹲踞もある。

・**縁先手水鉢（えんさきちょうずばち）**

建物の濡縁（ぬれえん）などに置く手水鉢のこと。

・**石灯籠（いしどうろう）**

本来は神社仏閣のためのもの。茶庭の成立とともに庭園の照明具として用いられることになった。特に江戸時代以降、様々な形式が登場した。自然石など様々な石を集めて組まれた灯籠を山灯籠（やまどうろう）、化灯籠（ばけどうろう）と呼ぶ。

3. 日本庭園のキーパーソン

・**路子工（みちこのこのたくみ）**

百済からの渡来人。記録に残るわが国最古の作庭技術者。『日本書紀』によると推古天皇 20 年（612）に帰化。須弥山（しゅみせん）や呉橋（くれはし）のある庭園を作庭した。

・**橘俊綱（たちばなのとしつな）**

平安時代中期から後期にかけての貴族。藤原頼道の次男。日本最古の作庭指南書である『作庭記』の著者とされる。

・**夢想疎石（むそうそせき）**

鎌倉時代末から室町時代初期にかけての禅僧。京都の西芳寺庭園、天龍寺庭園、岐阜の永保寺庭園など、いまに残る名園を手掛けた。

・**雪舟（せっしゅう）**

室町時代の禅僧で画家。日本独自の水墨画風を確立し、その作品の一部は国宝に指定されている。山口及び北部九州において雪舟作とされる庭園は多いが、いずれも確証はない。

・千利休（せんのりきゅう）

戦国時代から安土桃山時代にかけての茶人。わび茶の完成者として知られ、露地（茶庭）の基本形をつくった。

・小堀遠州（こぼりえんしゅう）

安土桃山時代から江戸時代前期にかけての大名。古田織部に茶の湯を学び、王朝文化の美意識を茶の湯に取り入れた。作事奉行、茶人として建築や作庭に携わった。弧蓬庵、仙洞御所などがある。

・小川治兵衛（おがわじへい）

明治中期から昭和初期にかけて活躍した庭師。山縣有朋の無鄰菴庭園（京都）をはじめとする政財界人の別荘の庭を手掛け、近代庭園の先駆者とされる。

・重森三玲（しげもりみれい）

昭和を代表する造園家、日本庭園研究史家。全国約 500 庭を実測調査し、200 近くの庭園を手掛けた。京都の東福寺庭園など文化財に指定されたものも多い。

4. 日本庭園の見方・楽しみ方

① 庭園の歴史的背景を知ろう！（入口サイン）

ポイント その時代の人の気持ちになって庭を観る

② 庭園のルート・観賞地点を確認しよう！

ポイント 庭の全体構成（周遊 or 座観/明るい or 暗い等）を把握する

③ 庭園デザインの骨格（石組）を把握しよう！

ポイント 成長した樹木によって石組が隠されている可能性もあり

④ 主人・作庭者は何を主張（表現）したいのか考えよう！

ポイント 想像力を膨らませて！

⑤ 灯籠や手水鉢など石造物をチェックしよう！

ポイント 石造物には流行あり！特に明治時代以降は巨大化！

⑥ 植栽の管理手法をチェックしよう！

ポイント 庭の良さを理解した剪定か？

⑦ 気になる仕掛け（石組）を再確認しよう

5. 出雲流庭園について

・出雲流庭園とは

- 出雲の風土、歴史、地形的特徴、経済などの外部要因により生まれた、出雲地方に共通してみられる特徴的な意匠を持つ庭園のこと。
- 江戸時代の終わりに生まれ、明治以降に数多く作られたと想定されている。

・出雲流庭園のはじまり

- 江戸時代の庭師・沢玄丹が、出雲流庭園の創始者と伝えられるが、その実態は不明（実在したかも分からない）。
- 小口・戸田（1927）『出雲流庭－歴史と造形』が、「出雲流庭園」という名称の初出。

・出雲流庭園の特徴

（１）周囲を塀で仕切られた中庭。庭を一幅の絵画のように見せるように注文を設ける。
（２）裏鬼門からの邪気を祓うため、庭の南西隅に大きな立石を配する。
（３）白砂や赤砂を敷く。
（４）クロマツを雲竜形に仕立てる。
（５）庭園の南東に灯籠、北西に雪見灯篭を配する。
（６）天水と称される巨大な手水鉢を客間の南に据える。
（７）樹種は常緑樹が中心。
（８）出雲の七木（ナギ、タラヨウ、モッコク、モチノキ、ヒイラギ、ナンテン、イトヒバ）を植える。

※上記、林秀樹「「出雲流庭園」に秘められた技と魅力」（『庭』246 号）より、一部改変した上で、転載。

その他にも、『出雲流庭－歴史と造形』では下記の点が指摘されている。

- 枯山水式の庭園が多い。
- 起伏の少ない平面的な庭園が多い。
- 飛石の技法的特徴（高く打つ。石臼を転用。大きな踏分石。十字打ち。）
- 短冊石（短冊状の石）を飛石の間に配する。

【参考文献】

小口基実・戸田芳樹（1975）『出雲流庭園－歴史と造形』，小口庭園グリーンエクステリア，pp.177

林秀樹（2021）「「出雲流庭園」に秘められた技と魅力」，『庭』246 号所収，p.68-71